

末政さんは、「すえまさ百貨店」、であった。

屋号の「たろつさ」は先々代の名前を取ったものである。

子供たちの喜びそうなもの、欲しくても中々買つて貰えない物が店頭
に飾られていたのが、鮮烈な記憶である。

古い建物だと思うが、現在でも美しい。

隣の朝日さんは「時計屋」であった。

当時の時計は「貴重品」の最たるもので、懐中時計なり、腕時計を持つ
ている事は自慢であった時代である。

湊谷の家の以前は、車麩の工場であった。

私の祖父が、地所の持ち主であったせいか、よく工場の中を見せて貰つ
た、炭が赤々と燃えているピットに鉄の棒に巻かれた麩が回つて焼かれ
ていた有様が、今でも目に見えるようだ。

麩の工場の跡に吉田の「箴屋」があつたように記憶しているが、場所が
曖昧であるのが残念。

西の方の松林の中に「たねの会社」と呼ぶ北村さんの工場があつたが、
私の記憶が鮮明でない。

蚕の種を加工して、家々の養蚕の材料を作っていたらしく、蚕種の販
売人の判が出てきた。

